

# 世間解

第四二五号

令和五(二〇二三)年七月

発行 西法寺

## 念仏もうさるべし

― 聖徳太子に聞く(その三) ―

七月であります。本格的な暑さがやってまいります。有縁皆さまにはお身体充分にお気をつけいただきますようにお願いもうしあげます。

猛暑の中にあっても阿弥陀さまのご本願は変わることなく私の上に「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とはたらき続けておつてくださるのであります。

さて、先月は宗祖・親鸞聖人が生死出べき道を確認するために法然聖人のもとに行くべきかどうかというのを聖徳太子のご示現を得ることによって決断しようとして六角堂参籠に踏み出してくださいました。というところまでお聞かせをいただいたのであります。

恵信尼さまのお手紙によれば、

山を出でて、六角堂に百日籠らせたまひて、後世をいのらせたまひけるに、九十五日のあか月、聖徳太子の文を結びて、示現にあづからせたまひて候ひければ、…

とありますから、参籠されてから百日を待たずして聖徳太子のご示現をえられたようです。おそらく瞑想の中で感得されたものでしょう。

この当時の特に修行者は「夢」というものをとても大切にされました。

親鸞聖人のお師匠さまである法然聖人が主張された「万人がお念仏申すことによつて漏れることなく救い取られていく」という阿弥陀さまの選択本願念仏による救いの法門を真っ向から厳しく批判された梶尾の明恵上人高弁(1173-1232)というお方は十八歳からお隠れになる直前まで四十年間、『夢記』というお書物にご自身の夢を克明に書き残し分析されておられます。

起きているとき、つまり自分の意識がはっきりしているときはあらゆる感情をある程度コントロールすることが出来ます。

しかし、眠っているときはそうはいきません。意識下にある思いが自身の意識でコントロールされることなくそのまま出てきます。

真摯な仏道修行者はそれが夢であり、その夢(つまり、自身の意識が届かないところ)を浄化しようとしたわけですね。その意味で、夢というものをとても大切に考えましたし、また夢によって煩惱の束縛から離れた仏菩薩の示現を感得しようとする一面もあったわけですね。

さかのぼれば、法然聖人に阿弥陀仏の本願の救いを確認させてくださる大きな縁となった中国の善導大師(563-645)も『観経四帖疏』という

『観無量寿経』を「ご解釈されるお聖教をお書きくださったときに夢の中で聖僧からご指示を受けられご自身のお領解の間違いないことを確認しておられますし、その善導大師のご指南によって阿弥陀さまの選択本願念仏という全く新しい仏道に開眼せられた法然聖人もその仏道の確かさを思索される中で善導大師が夢の中に顕れてくださっています。

さて、親鸞聖人は今の自分には比叡山の学問と修行では自身が救われ万人が救われてゆくという仏道を極めることが出来るという確証が持てない。京都の市中で、若しかするとそのことをはっきりと教えてくれるかもしれない

法然聖人という方がおられる。しかし、自分を仏道に導いてくださった得度の師匠である慈円僧正をはじめとして周りの僧侶たちは口をそろえて法然聖人を批判する。しかし、聞こえてくる法然聖人の教えには心ひかれるものがある…

そして六角堂に参籠された親鸞聖人が感得された聖徳太子の夢の告は、  
行者宿報設女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂  
という四句の偈であったと考えられます。

梯實圓和上は、「行者よ、あなたがもしも戒律を破って配偶者を持たなければならぬ状況におかれたときは私(観音)が玉女身(女性)となつてあなたの妻となりましょう。そしてお念仏申すあなたの生涯を美しくかざり、臨終を迎えるときはあなたを導いて極楽に生まれさせてあげましょう」と語訳くださっています。親鸞聖人は観音さまからこのような示現をお受けになったのであります。このご示現と法然さまがどう結びつつのかは、スミマセンが次回に…。合掌

